

二〇二二年二月四日

立春の日に走り根のしるきかな
春風が通ふ微笑のマリア像
立春の空にゆくモノレール
寒椿活けて亡き子の忌を修す
立春の一番札所に香を焚く
枝絡む日に蠟梅の匂ひけり
煮凝りに心許なき箸の先
目こぼしの豆が転がる今朝の春
登校の子らはだれ野に道草す
鯰跳ねて立春の日を散らしけり
畑のものの洗ふ水桶厚氷
老の吾もバレンタインの菓子作る

二〇二二年二月三日

冬銀河息子と並び帰りけり
雪吊を金色に染む町明かり
御手洗の柄杓を拒む薄氷
産土の鳥語姦し春隣
鬼やらひくぐもり声に彌宜元氣
豆を撒くきれいどころと力士どち
海の橋大きく撓む四温晴
関のごとき歓声追儼寺
豆撒きへ法螺高らかに先導す
杓で割る手水に張りし薄氷
洗濯機凍てて廻らぬあしたかな
廃屋に隠れ蠟梅匂ひけり

ひかり
つくし
菜々
あさこ
三刀
ともえ
花茗荷
とううち
雅流
うつぎ
有香
ぽんこ
あおい
花茗荷
満天
とううち
百合
はく子
わかば
きづな
菜々
三刀
あさこ
よし子

風花の空へ撒かれし福の豆

鬼は外平らき余生願ひけり

老犬に合はす歩みや日脚伸ぶ

二〇二二年二月二日

風花や温き餡饅ふところに
里山は一夜の雪に白変す
葬送の読経に深雪降り止まず
葦枯れて城濠の未だ覚めやらず
ワイシャツのボタン繕ふ春隣り
足踏をしてバスを待つ息白し
炉の炭のはじけて後は機嫌よし
冴返る汀の鷺の身じろがず
熱き茶を飲む玻璃の外は深雪積む
日脚伸ぶ水陽炎の堂庇
歩一步日矢に煌めく今朝の霜
寧かれと風花の舞ふ十字墓
寒暁のお湯たつぷりと沸かしけり

二〇二二年二月一日

休み田に獣道あり下萌ゆる
背筋いま通り過ぎしは風邪の神
息白く駈くる遅刻の母子かな
凍空に靴音撥ねる木橋かな
八房と名づくを宝梅の宮
車椅子押すも押さるも着ぶくれて
湯上りや一気飲みせし寒の水
落とし物手袋枝に空を指す

はく子
英子
ぽんこ
きづな
よし女
三刀
わかば
あおい
はく子
ともえ
わかば
百合
とううち
英子
うつぎ
あおい
なつき
ひかり
わかば
有香
こすもす
なつき

追儼寺へと列なして幟立つ
終わりなき子らのなぞなぞ日脚伸ぶ
探梅のつもりがウインドショッピング

二〇二二年一月三十一日

摘みたしやリフトの下のふきのとう
小流れの奏でる汀下萌ゆる
雪折れの音に子猫の耳立つる
おはようとカーテン引けば雪の木々
臥す人と窓越しに見る雪景色
愛犬の小さき墓の辺梅匂ふ
日脚伸ぶ淀の川面の昏れやらす
神木の幣白白と寒の宮
万歩計ノルマ達成日脚伸ぶ
息白く物干し竿を高く上げ
団らんの炬燵懷紙に金平糖

二〇二二年一月三〇日

斯く大きな手で餅ちぎる厄男
ジョギングの人と行き交ふ冬木立
しんがりの走者へ拍手温かし
木蓮の秀筆のごとく芽吹きけり
水仕事一つ残りし湯ざめかな
着ぶくれてたわむれの石蹴りそこね
大琵琶の松から松へ初鴉
八方へ媚びて豆撒く議員かな
池底に息潜めしや寒の亀
一閃の後のくぐもり雪の雷

きづな
あおい
菜々

ともえ

有香

花茗荷

こすもす

こすもす

なつき

せいじ

はく子

わかば

あおい

つくし

なつき

満天

ぼんこ

わかば

わかば

きづな

百合

なつき

つくし

とろうち

受験子の絵馬に紛れし恋の絵馬
瀬音いま春の調べと覚へけり
除雪車の信号無視をな咎めそ
鶏の長鳴く夕べ日脚伸ぶ

二〇二二年一月二十九日

春を待つ女子マラソンの熱気かな
半世紀炭焼守りて故郷出ず
ある筈の肝溶けてゐる鮫鰯鍋
雪しまく旅の一夜もまた一会
連日の警報続き雪無尽
恩師の書威儀を正して読み初む
沖よりの尖りくる波寒厳し

ともえ

宏虎

こすもす

よし女

雅流

よし子

うつぎ

せいじ

花茗荷

菜々

宏虎

毎日句会みのる選・二〇二二年二月七日